いつも近くで

栖坂月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
いつも近くで

【Nコード】
N6549K

【作者名】
栖坂月

【あらすじ】
別れ難いものと別れた後、そこにとどまるのは基本的に美談です。でも中には、離れたくとも離れられない者だっているかもしれませ
ん。

(前書き)

ホラー修行中。

プロトタイプ2号といたたところでは。

それにしても怖くないな！。

ウチのお爺ちゃんは、近所でも評判なくらい温厚で優しい人だ。でも、とても厳しい面も持っている。

まあ、そういうメリハリを抱えているのは人間として当然のことだと思うし、驚くようなことでもない。ただ、ウチのお爺ちゃんはその表れ方が少しばかり極端であるように感じていた。

同居している女子中学生としては、小うるさい年寄りになられるよりは、穏やかで柔和な好々爺の方がありがたいし、そういう点でウチのお爺ちゃんは申し分ない。少なくとも、躰と称して昔の習慣を押し付けてくるようなことはなかった。理解ある年寄り、そう言うって差し支えないだろう。

ただし、ただ一点の例外を除いては。

三世代以上の家族が同居している家では珍しくもないと思うけど、ウチにも仏壇がある。いつもお線香の匂いに満ちていて、同じ家中だというのに別の空間みたいな場所になっている。それもその筈で、毎朝毎晩お爺ちゃんがお参りを欠かさないからだ。線香に火を灯し、一心に拜んでいる。

いや、それだけならば良い。信心深いの一言で片付く問題だろう。お爺ちゃんの異様とも思える厳しさが発揮されるのは、お盆と正月に行われる『お墓参り』においてだ。掃除などの雑務に懸命なのはもちろん、その作法や礼節にもうるさい。一昨年だったか、ついによけて墓石の一部に足を掛けてしまった時などは、容赦なく殴られてしまった。この時ばかりは、子供とか孫とか男とか女とかは一切関係ない。普段なら『おねだり』を断ることが出来ないような孫相手であったとしても、である。

ここで、ご先祖に対する敬意を大切にする方なのねと思った貴方、それは違う。もちろんそういった側面もあると思う。そうでなければ仏壇に朝晩欠かさず通うことの説明が付かないし、習慣的な思考

として先祖に対する敬意を払っていることも感じられる。

だけどそれだけなら、飼っていたペットの墓に鎮座していた石を倒したくらいで激昂はしないと思う。それも犬とか猫とか、家族として生活していた感覚の強い生き物じゃない。飼い始めて一年経たずに死んでしまった金魚の墓だ。飼っていたのは私で、お墓を作った時は泣いたものだ。けどもちろん、その金魚はご先祖様ではないしお爺ちゃんが世話していたのでもない。お婆ちゃんは時折餌をあげていたみたいだけど、お爺ちゃんの方は感心なさそうだった。それが死んでお墓になった途端、この変わりようである。

何というか、極端すぎて不思議に思うことも多い。

そのギャップに奇妙な納得感を与えてくれたのが、半年前の大掃除のことだった。その時はテレビとかタンスとか、大きなゴミも出してしまおうということになって業者を呼んでいた。私も、小学生の頃に使っていた学習机を引き取ってもらった。そんな中、お爺ちゃんが自分の部屋から足踏み式のミシンを引っ張り出してきたのだ。お爺ちゃんに裁縫の趣味はない。言うまでもなくお婆ちゃんのも物である。

それを見たお父さんの「もういいの？」という問い掛けに、お爺ちゃんは短く「ああ」とだけ頷いていた。そのやり取りの雰囲気と神妙な表情が気になってお母さんに事情を聞いた私は、お婆ちゃんの失踪を知ることになる。

いや、知らなかったというのには正確じゃない。居なくなったことは、もちろん知っていた。ただ、その理由が『謎』であることを知らなかっただけだ。

あれは三年前、私は小学四年生だった。夏休みで、林間学校が企画されていた。親元から離れて初めての外泊ということで、かなり興奮していたことだけは憶えている。だけど、あった筈の楽しい思い出は、その後の騒動で消し飛んでしまっている。林間学校から戻ってきた私を出迎えてくれたのは、お婆ちゃんが居なくなっただけを嘆いて沈み込む家族だった。当時のお婆ちゃんは痴呆が進んでい

て、私も不意に怒鳴られたり殴られたりして戸惑った覚えがあるけど、たまにフラリと出歩くことも珍しくはなかった。ただ、それで大騒ぎになるようなことはなくて、遅くなったら家族が心配するか、その程度でしかなかった。

でもその日、林間学校で私はおらず、お父さんお母さんもこの機会にと食事へ行ったらしいのだけど、激しい夕立の中で買い物を終わらせて戻ってきたお爺ちゃんは、お婆ちゃんがないことに気付いたという。こんな雨の日に出て行ったことも驚きだけど、それだけじゃない。お婆ちゃんが寝ていた筈の部屋は誰かが暴れ回ったかのように荒れていて、襖には剥げ落ちたお婆ちゃんの手も残っていたそう。ただ搜索の甲斐なくお婆ちゃんを発見することは出来ず、あの雨で増水した川にでも転落したのだろうと結論付けたのだそう。ちなみに私が帰ってきた時には、すっかり片付けられていた。子供に知らせるようなことでもないという配慮だったのだろうと思う。

当時の私も子供だったせい、理不尽なストレスを与えてくる年寄りが居なくなった程度の感覚でしかなく、不意に死んでしまったのか施設に預けられたのか、いずれにしても当然のことがあったにすぎないという意識だった。それがまさか、陰惨な出来事を想像させるような現場を残して現在も行方不明とは、さすがに驚かされたものである。

と同時に、この瞬間からお爺ちゃんの持つギャップを少しだけ理解できるようになった。記憶を辿っても、あれだけ情緒不安定になったのはお婆ちゃんの失踪以降だ。その内面まではわからないものの、何かしら影響を与えているのは間違いない。

でも、だとしても今日の『アレ』は何だったのだろう。

「キリちゃん？」

「ん？ あ、なに？」

気付けばノートに置かれた右手は止まっていて、テーブルの向かいに陣取るサヤカがこちらをジッと見ていた。その眼差しは不安に

満ちている。そんな顔をされるほど、今の私はいつもと違って見えるらしい。

「……私なら、さっきのことそんなに気にしてないからね。勝手に庭へ出た私も悪いんだし」

「あー、うん、ゴメンね。いつもはもつと穏やかなお爺ちゃんなんだけどね」

「機嫌でも悪かったんじゃない？」

「かもね」

笑顔と共に話を区切り、再び教科書へと視線を走らせる。いや、走らせるフリをした。そうでもしないと、余計な話にまで発展しそうな気がしたからだ。

それくらい、あのお爺ちゃんは不自然に見えた。普段のお爺ちゃんを知らないサヤカですら、何か不自然なものを感じ取ったのだろう。だからこそ、このタイミングでこんなことを言ってきたのかも知れない。

ノートに数式を書きつつ、思い出してみることにした。

中学に入って初の定期テストが来週に迫っている。サヤカが家に来たのは、そんな理由からだ。私の部屋は散らかっているし狭いからと、空いている客間へ通そうと縁側を通りかかった時、彼女が庭を見て気付いた。

鮮やかなピンク色の花を咲かせているツツジに。

お爺ちゃんも一般的な年寄りらしく、盆栽という趣味を持っている。庭を埋め尽くすほど熱心ではないけど、庭という空間を利用しているのは、今のところお爺ちゃんだけだ。家庭菜園でも始めればなんて話が出ることもあるけど、不精なお母さんは生き物を育てること自体に無関心だし、かく言う私も金魚が死んでしまっただけからは何も育てていない。小学校で強制的に渡された植木鉢すら、野放し状態が基本だ。

そんな訳だから、庭にある植物はほぼ全てがお爺ちゃんのも物であり、そこにとやかく言う者は誰もいない。近づく者さえ、いなかっ

たかもしれない。

そこに今日、学校の花壇に水をやるのが日課というサヤカが訪れた。彼女は咲いているツツジを見るや否や、私が声を上げる暇すらなくツツカケを履いて庭に出る。

「ねえねえ知ってる？ 昔はツツジの蜜を吸ってオヤツにしてたんだって。ウチのお父さんもチューチューやってたらしいんだけど、おいしいのかな？」

能天気になんな言葉を口にしつつ、咲き誇るツツジへと歩み寄る。甘い蜜の匂いを感じ取ったのか、鼻を突き出してこんもりと繁る枝葉の元へと足を踏み込んだ、その時だった。

「そこで何をしとるかっ！」

怒声が、激しく響く。

剪定でもしようとしていたらしい黒ずんだ鋏を放り捨て、大股の荒々しい歩みでサヤカへと近付き、彼女の左腕を掴んだかと思うと強引にツツジから引き剥がした。それは何とというか、注意とか警告とかっていうレベルでもなくて、食べ物にたかるハエを追い払うような、そんな無遠慮さを感じられた。いきなりすることに驚いて、投げ出されるように尻餅をついたサヤカはもちろん私も、言葉一つ発することが出来ないまま立ち尽くすしかなかった。

そんな異様とも思える雰囲気を感じたのか、お爺ちゃんはすぐさま我に返り、いつもの柔和な表情で穏やかに謝罪しつつ、サヤカを助け起こしていた。その普段と変わらない、少なくとも変わらなく見えるお爺ちゃんとのギャップが、あまりにも激しかったからだろうと思う。私はどうしても、心の内に生まれたモヤモヤを払うことが出来なかった。

あのツツジは、そんなに大切なものだっただろうか。

いや、そんなことはないだろう。いつだったか、裏へと抜ける小道にそのツツジが張り出していたことがあって、お父さんから刈ってくれと頼まれていたことがある。でもいつまでも刈られなくて、結局はお父さんが刈っていた。その時、お父さんが怒られるような

ことはなかった筈だ。そもそも手入れをされているような感じじゃない。伸び放題だったからこそ、邪魔になったんだし。

なら、何か思い出があるとかはどうだろう。

絶対ないと言いつれもないけど、あんなにムキになるような理由には思い当たらない。そもそもあのツツジは、お婆ちゃんが居なくなった後になって植えられた物だ。居なくなったお婆ちゃんを偲んでというのも、少し不自然な気もする。

考えれば考えるほど、お爺ちゃんがあんなに怒る理由に心当たりがない。あれはまるで、お墓を足蹴にでもしたみたいな……。

「あつ！」

ふと気付く。

「どうしたの？ キリちゃん」

「あ……ううん、何でもない」

慌ててごまかしながら、思考を続ける。

お爺ちゃんが激しい怒りを見せる理由は、一つしか思い当たらない。でもあのツツジに近付いたサヤカは、間違いなく怒られた。

それってつまり。

血の気が引いて、視界が一瞬暗くなる。

確かめたくはない。でも気になって仕方がない。

聞くことは出来ない。でも無断で掘り返すのは難しい。

お爺ちゃんが家を空けることなんて、滅多にないからだ。

そういえば、お婆ちゃんが居なくなってから遠出しなくなったように思う。私が小さかった頃は、暇があるからと外泊することも珍しくなかった筈なのに。

気になるけど、今はどうしようもない。

私は待つしかなかった。

お爺ちゃんが死んで、監視を終えるその時を。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6549k/>

いつも近くで

2010年10月8日14時51分発行